



くすりと健康

一般社団法人
神戸市薬剤師会

アルコールと薬

アルコールを飲むと、胃や小腸で吸収され血管を通り、まず肝臓に運ばれます。そこで分解(代謝)されアセトアルデヒドに変化し、その後、酢酸を経て最終的には水と二酸化炭素になって体外に排出されます。この代謝を受ける際には、「酵素」という物質が働いてアルコールの分解を助けており、その処理スピードは、一般的に日本酒1合で約3時間といわれていますが、個人差が大きく、ほとんど処理できない人(お酒に弱い人)もいれば、とても処理が速い人(お酒に強い人)もいます。処理スピードを超えて摂取したアルコールは、血液を通して全身に運ばれ、体にさまざまな作用を及ぼします。そのひとつに、脳の中樞神経の働きを抑える作用があり、少ない量では理性をコントロールしている部分を抑えるので、本能や感情が表に

出てきます。これが酔った状態で、解放感や多幸感がみられます。アルコールの量が増えるにしたがって、抑えられる脳の部分が増えていき、記憶がなくなったり、運動領域が麻痺すると、ふらついたり千鳥足になったりしますし、呼吸中枢まで麻痺すると呼吸が止まり、最悪の場合は死にいたりします。さらに、アルコールは飲んでから吸収され脳に行くまで30分から1時間かかるので、その間に大量に飲酒すると酔いを自覚するころには、アルコールが脳に作用して自制心が利かなくなり、さらに飲んでしまう危険性があります。

さて、アルコールと薬の関係ですが、アルコールには中樞神経系を抑える作用や血管を広げる作用があり、同じような作用を持つ薬と一緒に飲むと、その作用が重なってお互いの効果や副作用が強くなる場合があります。たとえば、催眠鎮静薬、抗不安薬、抗うつ薬、抗てんかん薬、抗アレルギー薬、血管拡張薬、

血圧降下薬などとたくさんあります。ほかに、アルコールには胃の粘膜を荒らす作用もあるので、同じように胃の粘膜に作用する解熱鎮痛薬も一緒に飲むとよくないといえます。

また、アルコールは肝臓で代謝を受けるので、同じ肝臓で代謝を受ける薬は、アルコールが処理されている間、処理がなかなか進みません。その逆に薬の処理をする間、アルコールの処理が進まない場合もあります。そのため長い間、薬またはアルコールが体の中に留まり、必要以上に作用が強まったり、副作用が起こったりすることがあります。たとえば、抗生物質、血糖降下薬、抗うつ薬、抗凝血症などがあります。このように、アルコールと薬は一緒に飲むと(多少時間を空けても)よくない場合があるので、薬を服用中は飲酒を控えるか、医師または薬剤師にお尋ねください。

(北区 薬局エヒラファーマシー

松本博志)